

1. まえがき

橋桁, その他の構造物において, スラスは外力による曲げモーメントに対して全く抵抗しないものとみなし, 単に死荷重として処理してきた従来の設計法に対して, 全断面と有効に, 合理的に利用しようとする考えから合成桁が一般化した。鋼桁と鉄筋コンクリート・スラスとを連結した, いわゆる鋼合成桁は, 経済上, また剛性の高からみて優れた工法として盛んに用いられてきたが, 近年, フレストレストコンクリートの発達にともない, 鋼桁の代りにPCプレキャストビームを用いた合成桁が設計されるようになった。そこで筆者らは鋼合成桁におけると同様の考え方で, PC合成桁におけるコンクリートの硬化収縮, フリーフのおよぼす影響⁽¹⁾について応力解析を試みたので, その結果を報告する。なお, 簡単な数値計算例による比較検討は研究発表会時に行なう。

2. 初期応力の分布

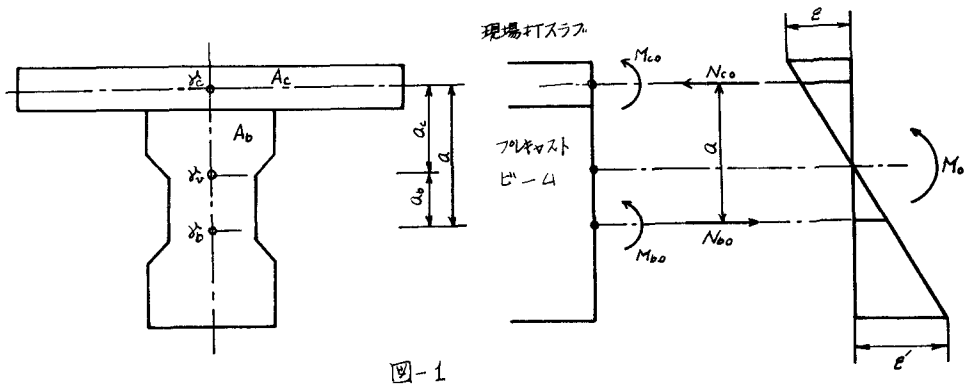


図-1

$t=0$ なる時刻に, 合成桁に曲げモーメント M_0 が働くと, これは図-1に示すようにスラスに作用するモーメント M_{c0} , プレキャストビームに作用するモーメント M_{b0} , ならびにスラスの重心に働く圧縮力 N_{c0} , とプレキャストビームの重心に働く引張力 N_{b0} とに分解される。釣合の条件より,

$$N_{c0} = N_{b0} \quad (1)$$

$$M_0 = M_{c0} + M_{b0} + N_{c0} \times a \quad (2)$$

回転ならびに水平移動などの変形の条件より,

$$\frac{M_{c0}}{E_c I_c} = \frac{M_{b0}}{E_b I_b} \quad (3)$$

$$\frac{N_{c0}}{E_c A_c} + \frac{N_{b0}}{E_b A_b} = \frac{M_{b0}}{E_b I_b} \times a \quad (4)$$

$n = \frac{E_b}{E_c}$, $G_v = A_b a_b = a_c \frac{A_c}{n} = \frac{a A_b A_c / n}{A_v}$, $I_v = \frac{I_c}{n} + A_b a_b^2 + \frac{A_c a_c^2}{n} \approx I_b + a G_v$ とおくと, 以上の式より,

$$N_{c0} = \frac{E_c I_c I_o}{A_v} \cdot \frac{a}{E_o I_o} \cdot M_{b0}$$

$$M_o = M_{c0} I_v / I_c / n$$

各分配モーメントは

$$M_{c0} = \frac{I_c / n}{I_v} \cdot M_o \quad (5)$$

$$M_{b0} = \frac{E_o I_o}{E_c I_c} \cdot \frac{I_c / n}{I_v} M_o = \frac{I_o}{I_v} M_o \quad (6)$$

$$N_{c0} = N_{b0} = \frac{E_c A_c A_o}{A_v} \cdot \frac{a}{E_o I_o} \cdot \frac{I_o}{I_v} M_o = \frac{a A_c A_o / n}{A_v I_o} \cdot \frac{I_o}{I_v} M_o = \frac{G_v}{I_v} \cdot M_o \quad (7)$$

3. コンクリートのクリープと硬化収縮の影響

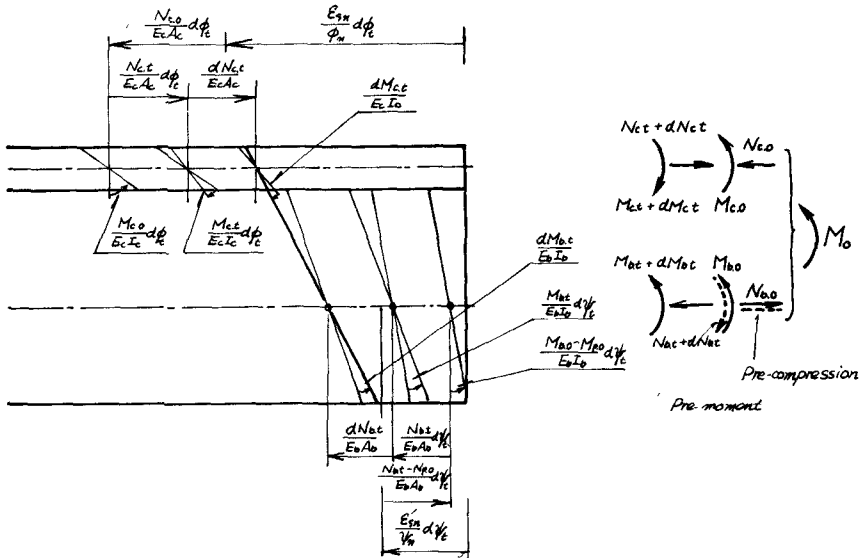


図-2

一般の合成桁において、コンクリートのクリープと硬化収縮によって、時日の経過とともに応力の移換が行なわれることは周知のとおりである。PC合成桁の場合にはフレキャストビームのみ、クリープならびに硬化収縮を起すからさらに厄介となる。ただし、フレキャストビームコンクリートの方はかなりの時日を経過しており、それらの現象は現場打のスラコンクリートに比して小さいのが普通である。なお、フレキャストビームには外力 M_o による軸力 N_{b0} の他にフレストレス N_{p0} 、モーメント M_{b0} の他にフレモーメント M_{p0} が作用していることを忘れてはならない。この場合のフレキャストビームはポストテンショ型とし、鋼線張力は終始一定とする。 M_{p0} なるフレモーメントを受けるフレキャストビームと、現場打スラムより成るPC合成桁が、 M_b なる継続的モーメントを受ける時の $t+dt$ 時刻までの断面力の変化ならびに、この dt 時間内の変形の状況、すなわち、(1)コンクリートの硬化収縮に基づく収縮量、(2) $t=0$ より圧縮力とモーメントが継続的に作用すると考えて、これらによるクリープひずみと塑性角変位、(3)時刻 t までに発生する引張力とモーメントによる塑性伸びと塑性角変位、(4)つぎの dt 間に新しく加わる引張力とモーメントによる弾性伸びおよび弾性角変

位，を起すスラフ側と，同じ考え方のフレキャストビーム側とにそれぞれ分けて示せば図-2のとおりである。図-2の分解を基礎にして釣合の条件式を立てるとつぎのようになる。ただし，両コンクリートの弾性係数 E_c, E_b は変化しないものと仮定する。

$$N_{ct} = N_{bt} \quad \therefore \quad dN_{ct} = dN_{bt} \quad (8)$$

$M_{ct} + N_{ct} \times a = M_{bt}$ — 一般に M_{ct} は $N_{ct} \times a$ に比して極めて小さいのでこれを省略すると，

$$M_{bt} = a N_{ct} \quad \therefore \quad dM_{bt} = a \cdot dN_{ct} \quad (9)$$

また，図-2 から水平変位，角変位に関する釣合の条件式を立てると，

$$\left\{ \begin{aligned} \frac{\varepsilon_{sm}}{\phi_n} d\phi_t + \frac{N_{co}}{E_c A_c} d\phi_t - \frac{N_{ct}}{E_c A_c} d\phi_t - \frac{dN_{ct}}{E_c A_c} &= \frac{\varepsilon'_{sm}}{\psi_n} d\psi_t - \frac{N_{bo} - N_{po}}{E_b A_b} d\psi_t + \frac{N_{bt}}{E_b A_b} d\psi_t \\ &\quad + \frac{dN_{bt}}{E_b A_b} + \alpha \cdot \frac{dM_{bt}}{E_b I_b} \end{aligned} \right. \quad (10)$$

$$\left\{ \begin{aligned} \frac{M_{co}}{E_c I_c} d\phi_t - \frac{M_{ct}}{E_c I_c} d\phi_t - \frac{dM_{ct}}{E_c I_c} &= \frac{M_{bo} - M_{po}}{E_b I_b} d\psi_t + \frac{M_{bt}}{E_b I_b} d\psi_t + \frac{dM_{bt}}{E_b I_b} \end{aligned} \right. \quad (11)$$

ここで， $\phi_t = \phi_n (1 - e^{-\eta t})$ ， $\psi_t = \psi_n (1 - e^{-\eta' t})$ とおくと，この二式から，

$$\frac{d\psi_t}{d\phi_t} = K (\phi_n - \phi_t)^\xi \quad \text{ただし，} K = \frac{\eta'}{\eta} \cdot \frac{\psi_n}{\phi_n^\xi}, \quad \xi = \frac{\eta'}{\eta} - 1 \quad (12)$$

$$\begin{aligned} (\text{8})(9)(12) \text{より} \quad \frac{dN_{ct}}{d\phi_t} \left[\frac{1}{E_c A_c} + \frac{1}{E_b A_b} + \frac{a^2}{E_b I_b} \right] + N_{ct} \left[\frac{1}{E_c A_c} + \frac{1}{E_b A_b} K (\phi_n - \phi_t)^\xi \right] - \frac{N_{co}}{E_c A_c} \\ - \left(\frac{N_{bo} - N_{po}}{E_b A_b} \right) \cdot K (\phi_n - \phi_t)^\xi - \frac{\varepsilon_{sm}}{\phi_n} + \frac{\varepsilon'_{sm}}{\psi_n} K (\phi_n - \phi_t)^\xi = 0 \end{aligned}$$

この微分方程式は非常に複雑になるので，実用上 $\eta = \eta'$ とみなせば， $d\psi_t/d\phi_t = K$ となるから，

$$\frac{dN_{ct}}{d\phi_t} + \beta [1 + \alpha K] N_{ct} - \beta [N_{co} + \alpha K (N_{bo} - N_{po}) + \varepsilon E_c A_c] = 0 \quad (13)$$

$$\text{ここに，} \quad \varepsilon = \frac{\varepsilon_{sm}}{\phi_n} - \frac{\varepsilon'_{sm}}{\psi_n} \cdot K, \quad \alpha = \frac{E_c A_c}{E_b A_b}, \quad \beta = \frac{A_b I_b}{A_c I_c}$$

初期条件 $t=0$ のとき $\phi_t=0$ ， $N_{ct}=0$ を入れてこの微分方程式を解くとこの一般解は，

$$N_{ct} = \frac{N_{co} + \alpha K (N_{bo} - N_{po}) + \varepsilon E_c A_c}{1 + \alpha K} (1 - e^{-\beta(1+\alpha K)\phi_t}) = N_{bt} \quad (14)$$

$$M_{bt} = a N_{bt} = \frac{N_{co} + \alpha K (N_{bo} - N_{po}) + \varepsilon E_c A_c}{1 + \alpha K} (1 - e^{-\beta(1+\alpha K)\phi_t}) \times a \quad (15)$$

(15)式を微分して(11)式に代入すると，

$$\begin{aligned} \frac{dM_{ct}}{d\phi_t} + M_{ct} &= e^{-\beta(1+\alpha K)\phi_t} \left\{ N_{co} + \alpha K (N_{bo} - N_{po}) + \varepsilon E_c A_c \right\} \cdot \left(\frac{K}{1+\alpha K} - \beta \right) a \\ &\quad + M_{co} - \beta K (M_{bo} - M_{po}) - \frac{a \cdot \beta K}{1+\alpha K} \left\{ N_{co} + \alpha K (N_{bo} - N_{po}) + \varepsilon E_c A_c \right\} \end{aligned} \quad (16)$$

ここに， $\beta = E_c I_c / E_b I_b$ 。初期条件 $t=0$ のとき $\phi_t=0$ ， $M_{ct}=0$ を入れてこの微分方程式を解くと，

$$\begin{aligned} M_{ct} &= e^{-\beta(1+\alpha K)\phi_t} \left[\frac{e^{\beta(1+\alpha K)\phi_t} - 1}{\beta(1+\alpha K)} a \cdot \left(\frac{K}{1+\alpha K} - \beta \right) \cdot \left\{ N_{co} + \alpha K (N_{bo} - N_{po}) + \varepsilon E_c A_c \right\} \right. \\ &\quad \left. + (\phi_t - 1) \left\{ M_{co} - \beta K (M_{bo} - M_{po}) - \frac{a \cdot \beta K}{1+\alpha K} \left\{ N_{co} + \alpha K (N_{bo} - N_{po}) + \varepsilon E_c A_c \right\} \right\} \right] \end{aligned} \quad (17)$$

結局，時刻 t における断面力は，スラフ側と N_c, M_c ，ビーム側と N_b, M_b とおくと，つぎのようになる。

$$\begin{cases} N_c = N_{c0} - N_{ct} & = (7)\text{式}' - (14)\text{式}' \\ M_c = M_{c0} - M_{ct} & = (5)\text{式}' - (17)\text{式}' \\ N_b = (N_{b0} - N_{p0}) - N_{bt} & = (7)\text{式}' - (14)\text{式}' - N_{p0} \\ M_b = (M_{b0} - M_{p0}) + M_{bt} & = (6)\text{式}' + (15)\text{式}' - M_{p0} \end{cases} \quad (18)$$

4. 鋼合成材の場合

これはビーム側がフレキヤストコンクリート^aの代りに鋼材を使用する場合で、鋼材は硬化収縮と起らないので、 $\psi_t = 0$ ，したがって $K=0$ である。また $N_{p0}=0$ ， $M_{p0}=0$ である。これから(14)(15)(17)は

$$N'_{ct} = N_{bt} = (N_{c0} + \frac{\epsilon_{sm}}{\phi_m} E_c A_c)(1 - e^{-\beta \frac{a}{2}}) \quad (14)'$$

$$M'_{bt} = (N_{c0} + \frac{\epsilon_{sm}}{\phi_m} E_c A_c)(1 - e^{-\beta \frac{a}{2}}) \times a \quad (15)'$$

$$M'_{ct} = M_{c0}(1 - e^{-\frac{a}{2}}) + \frac{e^{-\frac{a}{2}} - e^{-\beta \frac{a}{2}}}{1 - \beta} (N_{c0} + \frac{\epsilon_{sm}}{\phi_m} E_c A_c) a \beta \delta \quad (17)'$$

この場合の時刻 t における断面力は

$$\begin{cases} N'_c = (7)\text{式}' - (14)'\text{式}' \\ M'_c = (5)\text{式}' - (17)'\text{式}' \\ N'_b = (7)\text{式}' - (14)'\text{式}' \\ M'_b = (6)\text{式}' + (15)'\text{式}' \end{cases} \quad (19)$$

で表わされる。

参考文献 (1) 水野高明：鉄筋コンクリート工学